

自ずと道は開かれる

工学部 古澤 明

工学部物理工学科で量子コンピューターの研究をしている古澤と申します。私がどのようにして進学選択をしたかをお話し、進学選択に関して私が思っていることをお話ししたいと思います。

私は1980年に理科一類に入学しました。今からおよそ40年前です。なので、大幅に変わっていることもあると思います。しかし、本質はほとんど変わっていないと思うので、私の経験を中心にお話ししたいと思います。

まず、最初で最大の関門は、自分が何をしたいのかが良くわからないということだと思います。もちろん、東大に合格した人は学力優秀であることは間違いないのですが、ある意味「器用貧乏」で、どれも満遍なくできるため、ひとつの専門に絞るとするのがとても難しいのだと思います。また、高校で勉強してきた科目はいわゆる五教科で、それと同じような名前の学科は何を専門としているかがある程度わかるのですが、工学部の学科のように、五教科以外の名前が付いている学科では、何をやっているのかが良くわからないというのが、事態を余計に複雑にしていると思います。

私も自分が何をしたいのか、さらにはそれがわかったとして、どの学部・学科に進学すればそれができるのか全くわかりませんでした。そのため、受験勉強からの開放感を堪能するため（かなり言い訳ですが）、サークル活動や駒場祭でのクラス企画に明け暮れていました。サークル活動は回転や大回転などのアルペン競技スキーをしており、ゴールデンウィークの奥只見での新歓合宿から始まり、夏は立山の雪渓での合宿、冬と春は木島平での合宿と年間50日はスキーをしていました。また、駒場のクラスには後に映画監督になった中田秀夫君がいたため、彼と一緒に駒場祭用の映画を撮っていました。

このように、ある意味「現実逃避」をしていたのですが、あっという間に進学選択（当時の進学振り分け）が近づいてきました。結局のところ、進学選択の時期になっても、自分が何をしたいかは全くわかりませんでした。というか、それがわからないということが自己否定に繋がるのが怖くて、それを考えることから逃げていたのだと思います。でも逃げ切れずに、その時が来てしまったというのが現実でした。切羽詰まった私はとてもいい加減に、理学部と工学部なら工学部、物理と化学なら物理、というような選択を行い、工学部の物理工学科を選択しました。

私は工学部物理工学科が何をやっているのかを大して調べもしませんでした。ただ、運も実力というか、適当に決めたこの進学は実に大正解でした。物理工学科は工学部にあるので、単に物理だけをやっているのではなく、回路学や制御論、さらに当時は製図までありました。つまり、ものづくりの基本を全て教えてもらえたのです。もちろん、単なるものづくりだけではなく、ディープな物理も堪能できるカリキュラムでした。今振り返ってみて、このようにディープな物理ともものづくりの両方を学べ、さらに兄弟学科の計数工学科にはコンピューターの専門家がいて、その人たちの講義を聴けたことは、私にとってかけがえのない経験だったと思います。それでも当時は、自分が何をやりたいのかの答えは得られませんでした。よく考えてみると、量子コンピューターなどは影も形もない時代なので当然ではありませんが。

私はその後、物理工学専攻の修士課程に進学しました。それも特に、当時やっていた半導体の光物性の研究がしたかったわけではなく、駒場のときからやっていたアルペン競技スキーを続けたいという不純な動機でした。もっと正確にいうと、自分の職業選択から少しでも逃れていたいという欲求から、競技スキーを続けていたいんだと自分に言い聞かせていたように思います。その後、会社に就職し、アメ

リカに留学し、さらに東大に転職して今があるわけですが、東大に転職する頃になってやっと、自分が何をやりたいのかがハッキリわかりました。年齢にして30代半ばです。そのころから量子コンピューターの研究を始めたのですが、理工学科への進学が実は大正解で、その選択が自分のやりたいこと、つまり量子コンピューター研究を与えてくれたのだと気づきました。何せディープな物理とものづくり、さらにはコンピューターの知識を全て与えてくれたのですから。でも、これは結果論に過ぎません。これを狙って理工学科への進学を決めたわけでは決していないのです。

このように、私は30代の半ばまで自分のやりたいことがわからず、そのため進学選択では本当に適当に進学先を決めました。これは私が未熟だったからと言えますが、実はこのような人が大半なのではないかと思っています。最初の話に戻りますが、東大生は「器用貧乏」なので、ひとつのことに絞るといことはとても苦手なのです。そうは言っても専門は決めなければならないのが苦しいのだと思います。なので、みなさんへの先輩としてのアドバイスですが、高校や駒場で勉強したくらいで、自分のやりたいことがわかるというのは奇跡で、大概の場合、そのようなことはないかと割り切ることが重要だと思います。このように書くと、非常に無責任のように見えますが、このように言ってあげることが皆さんの気持ちを楽にしてあげられると思っています。私にとって、自分のやりたいことを早く見つけろというプレッシャーは、ほとんど拷問でした。そのようなことは後から振り返るもののように思います。

そうすると、駒場の2年生はどうやって進学選択をすれば良いのかという難題が残ります。必ず選択しなければならぬ訳ですから。残念ながら、これに対する一般的な解はありません。そのとき自分がやりたいと思うものを選択するしかないのです。東大は総合大学でとても大きな大学なので、選択肢は多すぎるくらいあります。そして、どこに行っても

レベルが高く楽しめると思います。なので、私がやったように「適当に」選んでも問題ないと思います。ただ、学部そして修士、さらには博士に進んでも余程ラッキーでないと、自分がやりたいことは見つからないように思います。これもそんなもんなんだと割り切ることが肝要だと思います。

いろいろ経験しているうちにだんだん明らかになっていくものが、自分のやりたいことのように思います。それがないと進学選択できないという訳ではありません。強い動機はなくても、良さそうに見えるくらいで決めるしかないのです。実際に進学してみても違ふと思ったら、一旦卒業してから他の学部・学科に学士入学するのもよし、修士から別の専攻に進学するのもよし、別の業種の会社に就職するのもよしです。さらに、その後転職するのも起業するのもあります。医学部を卒業し医師免許を取得してから工学部に学士入学し、最終的には工学部の教授になった先生を私は知っています。実はそのような人は大勢いるのです。人生に回り道なんてありません。回り道のように見えても実は最短ルートなのです。

強調しておきたいことは、進学選択は、これで人生がかっちり決まってしまうという類のものではないということです。例えば、物理を例に挙げると、理学部物理学科や工学部物理工学科に進学しなくても、いくらでも物理を学ぶことはできます。やり直しもやる気さえあればいくらでもできるのです。

長々と書いてきましたが、迷いのない人生なんてないと諦めて:) 進学選択をエンjoyしてくれれば、私としてはとてもうれしいです。結局は、自分にとってやりたいことは何かを追求していくのが人生だと思っています。どんどんいろいろなことに積極的にチャレンジすれば自ずと道は開かれます。